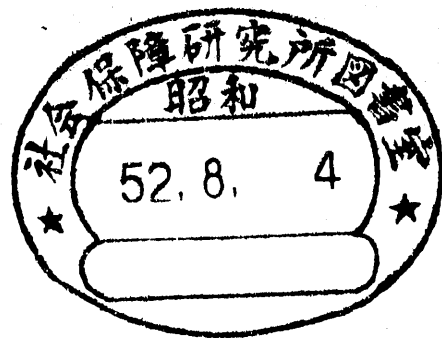




中間集団主義とその周辺

馬場啓之助

わが国の産業社会は中間集団主義とも呼びたい組織原理をもっていると、わたしは別の機会に唱えたことがある。中間集団主義というのは、企業などの中間集団が社会構成の中核となっていることを意味するものである。個人はこの中間組織体の構成員となることによってその生活の拠りどころをもち、その業績をあげるために組織体のあいだの競争に身を挺する。内に対しては組織体への帰属意識が根強く、外に対しては競争意識が旺盛である。あるいは、対内的には集団主義的であるが、対外的には個人主義的であり、その意味においては、中間集団主義は個人主義と集団主義の複合形態であるとも言えよう。

このような中間集団主義にたつて、西欧にすでに成立していた産業社会をモデルとし、その導入が図られた。産業社会は業績主義の倫理が中心となってその社会のありかたを規制すると言われているが、社会問題が提起され、これに対応して社会改良が進められてきたのは、この倫理と並んで連帯主義の倫理が台頭し、二つの倫理のからみ合いのうえに現代史が動いてきたことに由来すると思われる。これら二つの倫理と中間集団主義とを対応させてみると、業績主義の倫理の説くところは、中間集団主義のうちによく摂取されているとみてよいが、連帯主義の求めるところは充分満たされているとは言い切れないうらみがあるように思う。連帯主義の倫理が、中間組織体の内と外とを区別することなく、普遍主義にたつて事に当たることを説いているのに対して、中間集団主義は内と外との選別にこだわり、特殊主義的な性格をもちやすいからである。このことは福祉政策の進めかたと関連するところ少なくないと思われる。

中間集団主義にとってはもちろん依拠すべき中間集団が存在していることが、それが作動するための前提になっている。そのような中間集団の成立しにくい分野は、中間集団主義の周辺を形づくることにならざるをえない。この周辺に対して連帯主義の倫理の働きを及ぼすためには、ここでの組織づくりが重要な意味を帯びてくる。

中間集団主義は典型的には日本的労使慣行となつて現われている。したがって中間集団主義の周辺はこの労使慣行の及んでいないところとみても、いささか短絡的であるとのそしりはあるとしても、大きな誤りはないものと思われる。そう考えて差し支えないとすれば、日本的労使慣行の浸透していない分野の従業員とその家族のほか、高齢者はおしなべて言えばこの周辺に位置することになる。かれらの多くは企業定年があつてその帰属してきた中間集団から去っていかなくてはならないからである。したがって人口老齢化の進展につれてこの周辺は拡大していくとみてよい。

中間集団主義の周辺に対しては、依拠していくに足る中間組織体の機能を代行するような組織づくりが進められていかなくてはならない。そうでなくてはかれらの市民としての社会権が保障されないからである。この周辺における組織の造成はわが国の福祉政策の中心の課題であつたし、その重要さは今後増大していくものと思われる。これを高齢者に即して言えば、かれらの多くは親族同居の生活を送っているものであるから、その家族機能とこれを補完するコミュニティ機能の充実が望まれる。中間集団主義が支配するわが国の場合、福祉政策の課題のあらわれかたにも日本的な形態があると思われるが、中間集団主義とその周辺の問題としてその特徴ある形態を浮彫りにすることができるのではないかと考える。